

活動名	国際的に日本をPRする方法を考える～伝統芸能の視点から～
代表者氏名・所属	越智由紀子：人間文化創成科学研究科比較文化学専攻M1
構成員氏名・所属	能村悠里：人間文化創成科学研究科比較文化学専攻M1 村崎薫：人間文化創成科学研究科比較文化学専攻M1 永島愛：人間文化創成科学研究科比較文化学専攻M2 山口ゆみ：文教育学部人間社会学科4年

### 1. 概要

本プロジェクトは、伝統芸能である能を通して、お茶大生が国際的に活躍するために必要なことを学ぶために企画された。本プロジェクトで得られた効能は二つある。一つは、能楽師によって知られざる能の世界を、わかりやすく、時に実演を交えながら教えていただいたことである。そして、もう一つは、‘インターネットで一分で検索できる情報に価値はない’と言われる時代において、種々のワークや能楽師の講演、本学学生の経験談などから、‘経験を伴った’知識を持ち、物事を魅力的に伝えるということがいかに大切なことなのかを、身を持って参加者に学んでもらったことである。

### 2. プロジェクト詳細

本企画は、三部構成で行った。第一部では、地元や日本のことを実は‘知らない’ということを知ることが目的に、ファシリテーション技術を使用した活動に加え、人間社会学科四年の山口さんに依頼し、『教育としての演劇鑑賞』というテーマで講義を行ってもらった。第二部では、能楽師の金子敬一郎師と佐藤陽師の講演・実演から能の楽しみ方・魅力を学んだ。現代社会のサブカルチャーの話を変えて、至極わかりやすく楽しい講演をしていただいた。第三部では、地域おこしに参画する比較文化学専攻二年の永島さんの話を核に、地域・地元・日本を共同体の外に発信するとはどのようなことかを改めて討論した。

参加者は、いずれの部でも十数名であり、文教育学部、理学部、人間文化創成科学研究科所属の学生の他、教職員の姿も見られた。宣伝の時間が不足したため、あまり大勢に参加してもらうことが叶わなかったことは、反省点である。しかし、参加者からは、非常に好評をいただいた。

### 3. 参加者の評価

第一部では、自分たちの地元の名産や名物、観光地を一つ紹介しようというワークを行ったところ、「この場所、すごく楽しいところなんです！」と実体験を伴った紹介をした参加者は二名のみで、他の参加者は徹頭徹尾説明であった。その点をフィードバックしたところ、「‘楽しい’や、‘面白い’といった感情を伴って伝えるということは今までに意識したことがなかった。」と、参加者からは驚かれた。特に、講義を行った山口さんは、教育の中で演劇を取り入れる時、自分たちが演じるということに主眼が置かれることが多く、鑑賞者としてどうやって楽しむかという教育はあまりなされていない

と指摘しており、本企画の目玉である能という視点から見ると、観劇を通して、演劇の魅力を伝えられるようになることへの難しさを改めて感じるようになったのである。

第二部では、金子師は、能は「背景も変わらないし、舞台装置も簡素な上に、面を被っているので、表情も変わらない」が、それが、「キャストミスやイメージ違い」を防いでおり、観客の想像力をかきたてていると仰り、更に、そのことをわかり易く現代的に言い換えて説明して下さった。特にこのことに対しては、「能へのハードルが下がった」や「能の観方や楽しみ方がわかった」などの感想を頂戴した。実際に披露された舞は、抽象的な動きの少ないものと、荒々しい戦いを現しているような動きの大きいものがあり、比較して観ることで、「そのような違いがあることを初めて知った」、「とても面白かった」と参加者はしきりに感心していた。他にも、能の歴史や能面についても能楽師ならではの説明をしていただくことができ、参加した教授からも、「すごく有意義だった」と好評をいただいた。

第三部では、議論をしていく中で、「経験を伴った知識を発信することの必要性がわかった」と本企画の趣旨への賛同をいただくことができた。しかし、同時に「今後、どうやってそういった教育の場を増やすのかということが課題である」というご指摘と「実際に発信する機会を作ったり、場を作ったりすることが難しい」などのご指摘を賜った。

#### 4. 今後の課題

本プロジェクトの課題は二つある。一つは、既に述べたが、広報の充実である。せっかくの企画に対して思うように人員を集めることができなかつたことは大きな反省点である。二つ目は、実際に何かを‘発信する’という活動をするということである。予算の都合や運営人数を多く集められなかつたこと、また、活動範囲などの制約があったこと、そして十分な準備期間がなかつたことなどから、実際に‘発信する’というところまで至っていない。本プロジェクトの趣旨として、最終的に目指すべきは実践を伴ったプロジェクトの履行であると考えており、今後も同趣旨の企画を立て、継続的な活動を行っていききたい。



第一部の様子



第二部の様子



広報ポスター